

令和2年度 第2回茨城県高等学校産業教育生徒交流会 発表要旨

部会名	看護部会	
発表題名	難聴患者への視覚的アプローチの方法とその人らしさを尊重した看護のあり方	
学校名	私立大成女子高等学校	
生徒氏名 (学科・学年)	専攻科看護科 2年 綿引 花南	

【要旨】

今回、専攻科看護科1年生の成人看護学臨地実習で、受け持たせて頂いた難聴の患者様について、看護のあり方を考察したため、報告いたします。

患者様は70歳代の女性で、施設でベッドから車椅子移乗するときに転び、左大腿骨頸部骨折を患い、人工骨頭置換術を受けた後の方でした。入院前は、施設入所しており、退院後も施設入所予定であり、リハビリ目的のため、地域包括ケア病棟に入院していました。また、幼い頃の予防接種の副作用による、薬剤性難聴が生じており、口頭でのコミュニケーションは困難でした。

A氏は、転倒に対し「もう転ばないから大丈夫」や、車椅子のストッパーをかけずに立ち上がるなど、転倒転落の危険がある言動が見られていました。そこで、「#1ベッド移乗、車いす移乗に対する危険行動の理解不足による転倒転落の危険性」という看護問題を立案し、視覚的アプローチを用いて繰り返し説明を行なっていました。

1つ目のアプローチとして転倒転落を防止するための、ポスターを作成しました。ポスターには、車椅子やベッドの手すりのイラストを載せ、車椅子の手すりは青色の印を、ベッドの手すりには赤色の印を付けました。実物には、車椅子の手すりやベッドの手すりに同じ赤色と青色の折り紙を巻き、右手で赤色、左手で青色を掴み、車椅子へ移乗するよう伝えていきました。訪室のたびに声をかけることで、A氏はポスターの記載通りに、手すりを掴み、安全に移乗する事が出来、A氏に有効なものとなりました。

次のアプローチとして視覚的雑音を無くす事を考えました。A氏がベッドにいるときは棚の横にポスターを貼り、車椅子に移乗するときは床頭台に貼るな

患者紹介

年齢・性別: 70歳代 女性
 診断名: 左大腿骨頸部骨折
 人工骨頭置換術後


入院前: 施設入所
 退院後: 施設入所予定

リハビリ目的で地域包括ケア病棟に入院

既往歴: 左不全麻痺 薬剤性難聴



家族構成: 夫(死別), 義息子 同居していない
 キーパーソン: 姪

性格: 出来ていたことは自分でやりたい性格



A氏に見られた言動

もう転ばないから大丈夫

フットレストを上げずに立とうとする

ストッパーをかけない

視覚的アプローチの働きかけ

①ポスターを作成

1, イラストや色を用いて記載
 2, 実物にイラストと同じ色の折り紙を巻く



右手

右手→ベッドの手すり



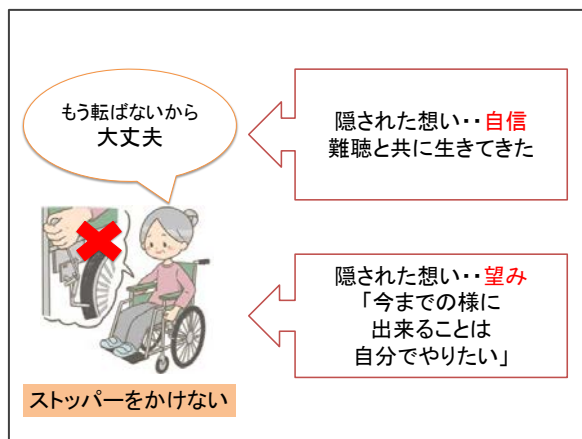
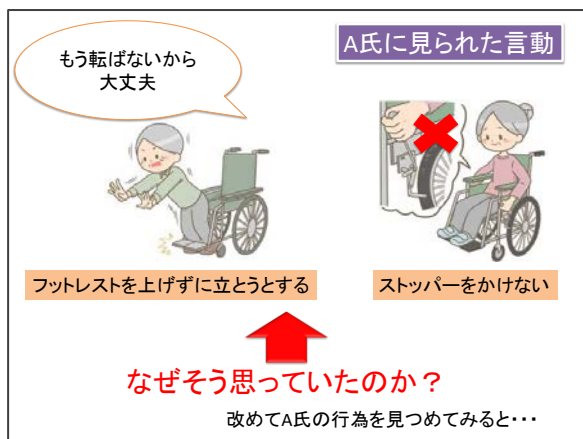
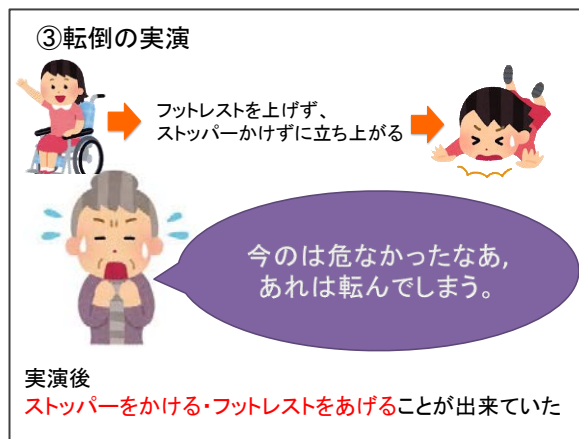
左手

左手→車椅子の手すり

ど,A氏の活動に合わせ,ポスターを貼り変えていました。しかし,ポスターを貼った周りをよく見ると,A氏の私物が置いてありポスターに集中できないことに気づきました。視覚的雑音があることは,ポスターの内容がA氏に入りづらかったのではないかと考えました。使用しない私物は片付けても良いかA氏に尋ね,視覚的雑音をなくすことで,ポスターの内容が入りやすいようにする事が重要であったと考えます。

3つ目のアプローチとして,私が車椅子のフットレストを上げず,ストッパーもかけずに立ち上がり,転倒する様子をA氏に見て頂きました。A氏は驚いた表情を見せるとともに,「今のは危なかったなあ,あれは転んでしまう。」との発言がみられ,実演の後は,促しにより,ストッパーをかける,フットレストをあげるが出来ていました。

私が,A氏に行った看護は,A氏に良い効果をもたらす事ができました。しかし,転んで骨折したのにも関わらず,「もう転ばないから大丈夫」と,車椅子に積極的に乗ろうとしていたのはなぜだったのでしょうか?その疑問は,実習が終わってからも解けませんでした。そこで改めて,A氏の想いや行為を見つめてみることにしました。



「もう転ばないから大丈夫」と言っていたのは,A氏が今まで難聴と共に生きてきた,という「自信」の現れであり,これからも難聴と共に生きていく自分自身に「大丈夫」と言い聞かせ,励ましていたからではないか。また,何でも自身で行おうとし,その結果,車椅子のストッパーのかけ忘れや,フットレストを上げずに立ち上がる行動に至ったのは,看護師さんや施設の方に迷惑をかけずに「今までの様に出来ることは自分でやりたい」という望みが隠されていた為なのではないか,と考えました。A氏の行動には「隠された想い」があったのです。

この隠された想いに目を向け,関わることは,A氏がこれからも難聴と共に生きていくための,確固たる自信に繋がると思います。A氏の強みを生かし,患者さんの隠された想いに耳を傾け,その人らしさを尊重して関わる事が大切であることに気づかされました。

以上のことから,聴覚障害を生じている患者さんには,視覚的にアプローチを行い,聴覚から得られない情報を補うことが重要であると学びました。また,隠された想いにも目を向け,その人らしさを尊重しながら関わる事が重要であると学びました。

最後に,今回実習で関わらせて頂いたA氏,ご指導頂いた実習病院の皆様,諸先生方に深く感謝いたします。

